

2022年度第2回生物多様性の保全に向けたネットワーク会議 議事要旨

日 時：2022年11月10日（木）18:30～20:30

会 場：オンライン（zoom ミーティング）

参加者：63名

内 容

●報告1：「若者世代の活動意識・その変化」（大阪 ECO 動物海洋専門学校 非常勤講師 地域まちづくり NPO・World Seed 代表 岡見厚志）

中間支援やボランティアに取り組む視点で、これまで幅広く活動を行ってきた。自らが「World Seed（NPO 法人）」を立ちあげ、「まちのコトを自分ごとに」をテーマに取り組んできたこと、などを紹介。ボランティアを構成する層への対価が支払えていれば、必ずしもお金を払う必要はないことや、若者のターゲット層を明らかにすることは、ボランティアへのコーディネートを行ううえで重要となることについて説明。また、学生が試験期間で多忙な7月末に実施した天神祭ごみゼロ大作戦では、会社単位で社会人層のボランティアをターゲットとしていること、大阪府下の高校クラブでは、少なくとも公立25校、私立18校のボランティア部があること等を紹介。

日頃から「キャッチーな入口」と「良質な出口」を用意し、取り組んでいる。自治体や学校との連携も非常に重要という話があった。

●報告2：「生物多様性へのいざないーきっかけ・想い・アクションー」（自然環境学習リーダー・有機無農薬農・造園会社スタッフ 稲田明子）

自ら業務として関わる、造園・土木業は、自然保護や生物多様性に深い関連があること等を紹介。

6年ほど前に公園管理運営士の資格取得を契機に、環境教育プログラムの受講がきっかけで、ボランティア活動を再開することになった。自然保全にあたっては、周りへの理解と尊重が重要という話があった。また、2019年頃からは、自分で食べるモノをつくれるようになりたいと、有機無農薬が学べる社会人向けの週末農業学校へ通う。この経験を活かし、子どもに対して、自然体験を提供するようなイベントを開催。こうしたイベントは、企業のエコ活動につながっていく。という話があった。イベントや自然ボランティアでは、自然に触れる機会が減るなか、子どものうちに他の生き物への理解が必要で、自然や生き物のことを伝えるために、さまざまな人々の参加が求められる。

活動の継続のためには、生活の維持をはじめ、楽しかった経験をもとに、色々な人をつなぎあわせていけることになれば、さらに活動が広がる。

●基調講演：「若者世代 生物多様性にどうつなぐ」（大阪公立大学大学院農学研究科 平井規央教授）

生物多様性をとりまく、最新の世界の動き等について紹介。COP15（生物多様性条約15回締約国会議）は、今年12月にカナダモントリオールで第2部が開催される予定である。1972年開催のストックホルム会議では、世界で初めての大規模な政府間会合が開かれた（これをきっかけに6月5日は「環境の日」）。その50年後の今年2022年は、ストックホルム+50として、若者を中心に見据えた部分があった。また自然に関するテーマとして「都市と市街地に自然を取り入れる」などの意見があった。

今後の世界の環境問題において、世界の人口の半分以上を30才未満の若者が占めることから、若

者の参加が重要となる。コロナパンデミックを経て自然が取り戻されるのを見た今日の若者が将来必要とする最小限の自然資源を明らかにする必要がある、様々なレベルで若者がさらに活躍することが重要となる。

このほか、少し古い情報となるが「性別、年代別のSDGs認知率」、「若者の意識調査」の結果について紹介された。No15の「陸の豊かさを守ろう」の認知率は低い一方で、環境問題や社会課題に取り組む企業で働く意欲は、学年とともに割合が増える傾向にあることについて、説明があった。また、身近は例として、工夫次第で、若者の関心を集めるイベントなど、実施できることについて説明があった。

●情報提供：「新入材つどう 生物多様性保全事業プラットフォーム」（環境事業協会・ネイチャーおおさか共同企業体 秦野悠貴）

生物多様性保全事業プラットフォームでは、昨年度から若者世代を中心に活動を行う。具体的な活動として、枚方市（穂谷での調査活動）、大阪市（鶴見緑地での田・畑農活動、ネットワーク会議等の企画立案）、茨木市（放置水田でのマコモ耕作）、堺市（臨海部での植樹活動）において実践を行っていることについて紹介。本プラットフォームでの活動を通じ、様々な団体と協働した活動を行う。

●トークセッション：若者世代の参加促進に向けて（司会進行：環境事業協会・ネイチャーおおさか共同企業体 岡、スピーカー：大阪公立大学大学院農学研究科 平井規央教授、大阪 ECO 動物海洋専門学校 非常勤講師 岡見厚志、自然環境学習リーダー 稲田明子、環境事業協会・ネイチャーおおさか共同企業体 秦野悠貴）

報告、基調講演をうけ、司会進行のもと、スピーカー4名で各自報告をふまえ、「生物多様性の主流化に向けて①かかわりのきっかけ、②アクションにつなぐ大切なもの③活動継続に必要なもの」について、意見交換を実施。主な意見は次のとおり。

《①かかわりのきっかけ》

岡見：年配の方の参加もあるなか、最初の段階で、若者の失敗なども許容した活動が必要。

稲田：まず、こどもたちに自然に触れることで、知ってもらうことが必要。楽しい遊びから学ぶ。

平井先生：ボランティアへのきっかけは生物多様性を知るのに重要。学生においては、就活への意識や高まりがある。子どもの頃の教育は、とくに効果が期待できる。

秦野：学生は忙しい生活のなかでの参加となる。年配の方がいる中でも、ハードルを下げるなどの工夫が必要。

岡見：参加者として楽しむことができる体験イベントはもちろん、個人・グループの活動継続や、SDGsでの起業をめざす若者をサポートしていくことも必要。

《②アクションにつなぐ大切なもの》

平井先生：留学経験のある学生は、生物多様性への意識も高い。若い頃の教育は影響があるため重要。

稲田：自然に触れ、楽しんでもらい、自然に対する考えをふやすきっかけになればよいと思う。クラブ、収穫体験など、いろいろな切り口を見つけることが必要。

岡見：自然に対して自らの思いがある人は、きっかけがなくても参加する。運営側としては、そうではない人のフィールドへの参加・継続を促す準備や配慮が必要。

秦野：楽しみながらやっていくことが重要。

《③活動継続に必要なもの》

平井先生：イベントでは、子どもをほめることを通じ、モチベーションを上げている。子どもと一緒に論文を書くことで子どもの可能性を広げることも有効で、活動継続においては不可欠な要素となる。

岡見：参加者からスタッフ側の立場へ行く場合もある。失敗しても、チャレンジできる場をつくる必要がある。ネットワークをつくることでパワーが発揮できる。どんどん仕事をつくっていくことも必要。

稲田：子どもだけでなく、親子で共感のきっかけを作ることも重要。
さらに、食べるモノをつくる力を感じてもらうことが必要

(質疑紹介：若者世代の主流化につながる、様々な主体と連携したプラットフォームづくり)

大阪市：ネットワーク会議開催を通じ、環境活動の場の提供やマッチング、大阪市とその周辺の地域を含めた、地域連携プラットフォームの構築を進めたい。

●講評（大阪公立大学 平井規央教授）

- ・報告1では、ボランティア参加での参加においても、対価は重要。継続にあたってはチーム作りが有効。ターゲットを明確にする必要がある。
- ・報告2では、保全と破壊の両面のある仕事となるなか、いろいろな人をつなぎ合わせて巻き込んでいく。
- ・情報提供では、プラットフォームを通じて、自然環境の調査などの環境活動を行う。
- ・トークセッションでは、活動継続にあたり、チャレンジする場が必要。またそのあとの仕事ができる場をつくることも重要。さらに親子で共感を得ることが大切という話があった。これからも、情報交換の場を通じて、ネットワークの構築を進めていく。これらがうまく機能し、うまくまわっていけば、良いと考える。